

Title	バンに乗ったうるさい奴ら：新世代の旅行者たちと田園地方のユートピア的なもの
Author	ヘザーリントン, ケヴィン / 神田, 孝治[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 7 巻, p.187-195.
Issue Date	2002
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	edited by Tracey SKELTON & Gill VALENTINE, 1998, pp.328-342. Routledge / ©2002 by Taylor & Francis Group
DOI	

Placed on: Osaka City University

バンに乗ったうるさい奴ら

新世代の旅行者たちと田園地方のユートピア的なもの

ケヴィン・ヘザーリントン*
(神田 孝治** 訳)

Kevin HETHERINGTON

Vanloads of uproarious humanity:

New age travelers and the Utopics of the countryside

In *Cool Places*

edited by Tracey SKELTON & Gill VALENTINE, 1998, pp.328-342. Routledge

© 2002 by Taylor & Francis Group

若者文化の地理学

ストーンヘンジは、ピクトリア朝時代の公休日になると、騒々しい場所となった。「ストーンヘンジに向かう敬虔なドルイド教の巡礼者に...電気ショックが走った...あらゆる種類の色、人工染料の他の多くの色、そんなもので着飾ったバンに乗ったうるさい奴らなど、巡礼者は全然お望みじゃなかったのだ。奴ら、やって来ちゃあジョーク飛ばして大宴会、ミュージックホールのレパトリーにある甘美な流行歌を歌いだす...おまけにありふれた不作法に飽きたらず、ジンジャービールの一斉放射もおまいいしていた。」

(Chippindale, 1983; 173 からの引用)

若者文化の地理学には、ルイ・マラン (Marin, 1984) がユートピア的なもの (utopics) として描き出したことと、いくつかの問題で関係する事象がある。ユートピア的なものとは、ある種の空間的戯れである。それによって、社会についてのユートピア的光景と、その光景にこめられた道徳的秩序が、空間的实践へと翻訳される。そしてこれは、良い社会についての思想を、特定の場所の表象に重ね合わせることを通じてなされている。マランの挙げたユートピア的なものについて

の最良の事例は、ディズニーランド (Marin, 1984) とアメリカ (Marin, 1992) について書いた彼の読み物の中に見ることができる。私は本章で、新世代の旅行者たちというある特定の若者文化の地理学と、イギリスの田園地方において彼/女らが争ったユートピア的なもの、について考察することにしたい。

若者文化の歴史にはいつも、たいていの場合は社会の周縁において、己のための空間を創出し、縄張りを作り、自身の場所を発見する、といった要素が刻み込まれている。華々しいサブカルチャーだろうが、もっとありきたりで体制順応的实践であろうが (Thrasher, 1927; Becker, 1946 を参照)。自身の場所を見つけることは、時としてどこか他の想像上の自由の空間に行くことを意味している。そこは、より真正で (E. Cohen, 1973, 1979 を参照)、より自分自身の空間である。ここでは、帰属やグループの同一化といったカテゴリーを確立することによって、包含と排除の問題を決定することが出来るのだ。他の場合のそれは、動くことなく、そこでの自身の状況を変えようと挑戦することを意味する。いずれの場合においても、ある特定の場所が、社会的に付与された表象とは異なるものとして理解されるようになる。すなわち、ちょうどある種の音楽や服装のスタイルによる同一化が若者文化にとって

* キール大学

** 大阪市立大学・院

重要であるように、価値や信念を表現する意味がその場所に付与されるのである。

本章では、新世代の旅行者たちが、田園地方のユートピア的構成を含んだ差異の空間に、いったいどのように存在しているのかを考察する。そこは、田園地方の主要な表象、すなわち、英国、なかでもイングランドの文化における、牧歌的な平和の絵のように美しいアルカディアとされる表象とは違う場所である¹⁾。新世代の旅行者たちについての文献は、数は少ないが、増加している (Earle *et al.*, 1994; Halfacree, 1996; Hetherington, 1991, 1992, 1993, 1996b; Lowe and Shaw, 1993; McKay, 1996 を参照)。もっとも、旅行者たちは、単なる若者文化以上のものである。いくつかの方法において、彼/女らは、より新しい社会運動や文化ポリティクスの形態を好んでいる (Melucci, 1989 を参照)。それは、環境、共同社会、オルタナティブな生活やライフスタイル、道路建設反対、そして共有地の利用や権利に関わるような問題への関心を伴っている。新世代の旅行者たちは、異種混淆の現象なのである。旅行者たちが若者文化のままているのは、いかに彼/女らの生活様式が生じたのか、そして多くが比較的若い傾向があるから (決して路上で旅して生活するすべての人がそうだというわけではないが)、という意味においてである (ただもっと他の文化にも属しているが) 旅行者のアイデンティティに単一のものはない。旅行者という特定の部族の気質は、多くの異なった種類のアイデンティティを許容する。旅行者のアイデンティティは、ある場合にはかなり一定であるが、反面、他の場合にはいつでもとても順応性があり移り変わるのだ。ある人にとっては、新世代の旅行者たちについて話すことがまったくもって懐古趣味のように思われるかもしれない。旅行者たちが、レイバー、道路建設反対者、環境保護主義者、外形及び人头税抗議者たちと分かち合ってきた、アイデンティティの境界で起こったことのどれについても。なぜなら、いわゆる「非戦闘車両部隊」の形をなした旅行者たちが、1982年には世間の耳目を集めるようになっていたからだ²⁾。

他の国でも、同じような種類の若者文化は、長きにわたってたくさんあった。20世紀の変わり目におけるドイツの若者運動ことワンダーフォーゲルは、放浪し、田舎生活することを端緒に着想された (Becker, 1946

を参照)。1960年代に北アメリカあたりを旅したヒッピーにも近いものがある。彼/女らは新世代の旅行者たちに好まれたような、きらびやかに装飾されたバスに乗っていた。放浪観光という、ヒッピーのインドへの道としばしば関連づけられる現象にも、なにがしかの類似性がある (Cohen, 1973)。オーストラリアでは、エアズロックが「新世代の巡礼者」を魅惑する場となってきた (Marcus, 1988 を参照)。オーストラリアではさらに、自然に帰ることを試みて、近代的生活の閉塞から自由なライフスタイルにおいて、茂みの中で生き抜く人々、いわゆる「野生回帰者」も見受けられる。

新世代の旅行者たちは、英国若者文化の現代の地勢を形づくる重要な一部分である。たとえ彼/女らが、新世代の旅行者たちではなくて他の何某かの名で呼ばれる、新しい文化に至る複合体を創り上げ (続け) るとしてもである (McKay, 1996)³⁾。彼/女らはまた、現代における社会的同一化のあり方の特徴だとされる、新部族的現象のよい実例ともみなされるだろう (Maffesoli, 1988, 1996; Bauman, 1990, 1992 も参照)⁴⁾。田園地方の表象の観点から旅行者たちを考察する際には (Halfacree, 1996 を参照)、地勢としての田園地方が、土地利用ばかりでなく、空間の表象、特にユートピア的なものの表象の点で争われていることを認識することが重要である。多くの人々にとっての田園地方が、絵のように美しく、穏やかで永遠な、都市の社会問題から自由などこかとして想像されるのに対して、新世代の旅行者たちにとっての田園地方とは、自由、真正性、神秘、精神性、放浪生活という幾分違ったものを意味しているからだ。ここでの問題は、これらのうちいずれの (もしくは全く他の) 田園地方の表象が「真実」かということではない。問題なのは、生き方についての主張に関する真実なのである。この主張は、ユートピア的な実践を通して表現され、それが道徳的秩序を巡るせめぎ合いの空間としての田園地方を生産するのだ。

新世代の旅行者の生活様式

新世代の旅行者のライフスタイルは、1970年代ヒッピーのカウンターカルチャー、特にその時分にはじまったフリー・フェスティバルの場に源泉がある (Mills,

1973; Clark, 1982; McKay, 1996 を参照)。フリー・フェスティバルは、大きな営利目的のフェスティバルと共に発展した。それはしばしば、束縛からの自由についての想像的なエトス、すなわち中世のフェアの理想と結びついた社会的道徳のカーニヴァレスクな境界侵犯に関連する、オルタナティブな社会のユートピア的モデルとして考えられていた。新世代の旅行者のライフスタイルは、このフリー・フェスティバル、なかでも 1974 年から 1985 年にかけて夏至に開催されていたストーンヘンジのフェスティバルと結びついて出現した。フェスティバルは、旅行のきっかけであった。1980 年代のはじめには、夏至のストーンヘンジが、車両部隊の形をなしてなされる年一回の巡礼の中心になった。はじめのうち、フェスティバルへの参加とは、週末に限って人々がするものであった。しかし、フェスティバルの思想といくつかのフェスティバルの間を旅する放浪の生き方は、すぐに人気を博したのだ。次のフェスティバルへ向かう途上で、公道を自由に使用する生活様式は、まさにフェスティバルそれ自体と同じくらい重要になった。旅行者たちの車はたいがい古いバスやバンで、それは彼/女ら自身の意味を乗せて、このライフスタイルの重要な構成要素となっていた。少人数のグループ同士がしばしばフェスティバルで出会い、きらびやかに装飾された大きな 1, 2 台の車で一緒に旅して夏を過ごすのだ (Garrard, 1986a, 1986b; Garrard *et al.*, 1986)。別のフェスティバルに近づくと、車に乗った少人数の旅行者たちのグループは、場所を不法に占拠するため、車両部隊に加わり大挙してフェスティバルに乗り込む。いわゆる非戦闘車両部隊のまわりでは、モラル・パニックが起こった。1980 年代半ばの英国メディアは、彼/女らが施しをせがんでくるだろうと報じている。身なりの汚い旅行者たちは、民衆にとっての悪魔の役回りとなったのだ。いわゆる「非戦闘車両部隊」の悪評は、1983 年頃に全国紙に現れ始め、ストーンヘンジへの道程で車両部隊が警察によって撃破される 1985 年までエスカレートしていった (Rojek, 1988; 1989) (図 19.1 と 19.2)。

しかしながら、新世代の旅行者たちが必ずしも車両部隊で田舎を動き回るわけではないし道路にいるわけでもない、と認識することは重要である。彼/女らの旅行には、はっきりとした季節的なパターンがある。通常、フェスティバルは 5 月から 9 月の間に開かれて



図 19.1 1986 年 ハンプシャー (Hampshire) の現場。旅行者たちは、ストーンヘンジに到達しようとしたが、非常に厳重な警察の監視の下にあった。警察が彼/女らの乗り物を撤去しに到着する前の早朝、ミーティングは開かれた。1985 年の「ビーンフィールド (Beanfield) の会戦」での衝突以後、人々がレジスタンスに不都合な票を投じたので、彼/女らは乗り物を、そしてある場合には子供を放棄しなければならなかった。そこで旅行者たちは、「法的に」子供や乗り物を取り戻す手段を講じなければならなかったのだ。

写真: Alan Lodge



図 19.2 300 から 500 人の人々が、ハンプシャーの現場からグラストンベリー (Glanstonbury) へと歩いていくことを決めた。自身の扱われ方に抗議するためだ。彼/女らは、グラストンベリーのフェスティバル会場にあるグリーンフィールド (Greenfield) に野営した。そこは、オルタナティブなエコロジカル・ライフスタイルのデモがよくおこなわれていた場所である。

写真: Alan Lodge

きた。これには、天気の良い日にフェスティバルを開きたいと望む実際の理由や、伝統的にフェアの日だというような層の上での重要性が関係している。さらに最もはっきりとした理由として、多くの旅行者たちにとって夏至が重要だというがある。たいていの旅行者たちは冬の間、友人や同類の人々と一緒に、おそらくは不法占拠で、ちょっと離れていて邪魔にならない高地や田園地帯に「いすわる」か、町や都市に舞い戻って住み着くのだ。ただ、この生活様式はしだいに心許ないものとなってきている。1994年に導入された犯罪正義法と公共秩序法が、不法侵入していると思われる人々を立ち退かせたり逮捕する警察権力を増大させ、さらにジブシーのための場を提供することを地方当局に命じていた以前の法律も無効としたからである。けれども、旅行者たちの抵抗は続いている。英国からヨーロッパ本土への移動を選択する旅行者たちが増加している間は、旅行者の生活様式は発達し続けていると考えられる。

真正性・ユートピア的なもの・ホーム

ユートピア的なものは、よい社会についての思想を空間的实践へと翻訳することに関連している。そのため、ユートピア的なものは、空間的实践を通じてなされる道徳管理の文化的パフォーマンスとして描き出すことができる。ユートピア的なものは、旅行者の生活様式の重要な側面である。この文化的パフォーマンスは、田園地方のような空間の表象の背後に横たわる決定不能の状況から生じる裂け目、マランが「中性 (the neutral)」というところの不確実性の空間で行われる (Marin, 1984)。マランは、テキストの意味が固定されずに果てしなく延期されるという、デリダ (Derrida, 1976) の差延の概念を用いて、ユートピア的なものという概念を、ユートピアについてのトマス・モアの16世紀の著述に立ち返って導き出している (More, 1985を参照)。モアは彼の想像上の島をユートピアと呼んだが、これは語呂合わせに基づいている。つまりユートピア (u-topia) とは、*ou-topia* というどこにもない場所と、*eu-topia* というすばらしい場所の両方を意味しているのである。マランによれば、この二つの意味の間の緊張は、ユートピア的なものの空間性を構成する差延の戯れを引き起こす (Hetherington, 1997も参照)。

どこにもない場所と想像された完全な場所との間における双方向の動きは、不確実性、両義性、非決定性の空間を、フーコー (Foucault, 1986) がいうところのヘテロトピアを縦断して行われる (Genocchio, 1995; Soja, 1995; Hetherington, 1996a, 1997も参照)。この空間では、良い社会についての表象やその道徳的秩序が、明瞭に表現され、かつ競い合っている。ユートピアは存在しない。存在するのは、良い生活や社会・道徳的な秩序に関する思想の、社会的現実への翻訳である。その現実とは、特定の空間の表象によって彩られるようになり、はっきりとした空間的特徴を有するのである (Hetherington, 1997を参照)。ストーンヘンジのような特定の場は、常に旅行者たちのユートピア的なものにとって重要であった。旅行者たちは、シールズの用語でいう社会的中心性、すなわちアイデンティティの焦点の場を有しているのであり、これはたいていの若者文化にとって重要なものなのである (Shields, 1992a; Hetherington, 1996a, 1996bも参照)。けれどもまた、このような旅行者の若者文化の醸成に関係し、彼/女らがアイデンティティを演じる舞台となる、より広範な空間的問題もある。英国の田園地方のユートピア的な表象は、全体として新世代の旅行者たちをとりまくポリティクスにとって重要なのである。

あるグループの価値は、空間的な用語を用い、このユートピア的なものを通して表現される。新世代の旅行者たちが採り入れてきた生活様式は放浪であり、これはフリー・フェスティバルの強調と、たいていは田舎の生活様式を伴っていた。そしてこの生活様式は、ホームとしての田舎に関連した真正性の裂け目に基づいた、ユートピア的なものを含んでいた。旅行者たちにとっての真正性とは、想像上の過去への郷愁に基づいている。都市生活ではない、自然と調和した理想的社会のモデルとしての田舎生活への郷愁に。旅行者たちは、近代社会によって自身に課せられたものとは異なった、ホームについてのオルタナティブな道徳的秩序を表現する。それは、小さなグループや情緒的コミュニティ (ブント *Bund*) における生活、という空間的实践を通してなされる。そこでは、生活様式を共有した仲間であることを強調し、すべてというわけではないが、近代技術や唯物主義の多くを遠ざけ、ノマディズムと関係する近代と反対なものとしての古代の自

由に同一化している。また彼／女らのホームの表現には、フェスティバルや往古の小作農による共有地儀礼でみられる、カーニヴァルの雰囲気もある (Hetherington, 1994)。

旅行者たちのユートピア的なものは、選択的ではあるが、過去に真正性を期待するものである。そしてしばしば、周縁的で抑圧されているものに焦点を当て、かつ同一化している。小作農、浮浪者、サーカスの団員、テキ屋、ジプシー、アメリカンインディアンに。そして彼／女らの生活様式に。このユートピア的なものとは明らかに、真正性の概念の中心に他の何よりも周縁の感覚をすえた、ロマンティックな光景と審美的なものに基づいている。

ある旅行者たちは、大地の上で慎ましく生活する草木と親しむ態度をとる。そして自然を、われわれを生み出した慈しむべき存在 (ガイア) としてみなしている。ティーピーは、アメリカンインディアンたちのスタイルに合わせて作られたものであり、そのような旅行者たちが好むであろう住居である。他の旅行者たちにとっては、ディガー思想という、庶民のための土地に関する昔の思想がより重要である。その思想に基づけば、田園地方はすべての人のものとして見なされる。そこでそういう旅行者たちは、共有地を利用する権利を主張する人々と同様に、土地所有とそれに付随する不法侵入法の思想に意義を唱えるのである⁹⁾。また、多くの旅行者たちは、自然宗教や地球の神秘的教義と一体感を持っている。これらのことを通じて、田園地方は、神聖で神秘的な場所としてみなされるようになる。それは、古代の聖地への注目を伴っており、退けられた知識の形式によって最良の理解がなされるものである (Michell, 1982, 1986; Devereaux, 1990)。「地球の神秘的教義」はたいてい、古代の場所についての研究を、それが近代科学批判の発端であるという観点から参考に行っている。そのうえ地球の神秘的教義の実践者たちは、いにしへの常民による景観の理解や解釈の仕方を遡って参考にした全体論的なアプローチを採用している。つまり、ダウジング、草原で狐の臭いをつける狩猟、そして特定の場所に関する民間伝承やしきたりの回復を行っているのである。地球の神秘的教義の言い伝えは、近代科学によって提供された理解の方法に異議を唱える。そして景観の中に、自然的なもの及び社会的なものを知って理解するための、忘

れ去られた実践を見出そうとするのである。古代の陸標や小道の分析では、古代社会について、技術的に洗練されており、近代科学によって失われ、拒絶され、周縁化されてしまった自然についての知識を身につけていたと論じている。新世代の旅行者たちは、地球の神秘的教義を研究する者たちの実践や認識論を取り入れてきたわけではない。そうではなくて、真正性についての類似したユートピア的なものを共有していたのである。それは、農業関連業者、郊外通勤者、観光客、科学者によって定義された田園地方についての支配的な見方と対立するものであった。

都市と田舎の対照性も、旅行者たちにとっては重要である。他の多くの若者文化と違い、彼／女らは都市よりも田園地方に一体感を持っている。田舎の真正性というユートピア的なものは、旅行者たちのアイデンティティ形成に重要な役割を果たしている。とはいえ、それはコンスタブル絵画のピクチャレスクな真正性ではなく、小さなスケールの共同部落的な連帯との同一化に基づいた真正性である。このことは、部族の思想や、近代産業社会の社会性よりも真正とみなされている放浪生活への同一化を通してしばしば表現されている。田園地方は、多くの旅行者たちにとっては、牧歌的平和のイメージを通して表現される田舎のアルカディアではない。そうではなくて、そこは神秘の場所なのであり、諸説統合主義者の偶像崇拜や全体論を通して、景観には神聖さが再び与えられているのだ。その景観のなかにおいて、意味やコミュニティ、そして自己発見を探求する旅はなされるのである (Eliade, 1969; Turner, 1973)。このユートピア的なものは、多くの地方居住者や、土地所有者、そして観光客のための、田舎のアルカディアの表象を特徴づけている真正性の思想とは対照的である。多くの人たちも、旅行者たちの田園地方に対するロマンティックな見方とかなりの面を分かち合っている。しかしイングランドの田舎の表象は、圧倒的に牧歌的なものである。それは自然を飼い慣らして耕す文化に基づいており、田舎は荒野から庭園に変えられている (Williams, 1985)。対照的に旅行者たちのユートピア的なものは、田園地方を、荒野に変えるのではないにしても、荒野が見出され自然があるがままに回復された場所に変えようとする。旅行者たちの真正性は、イギリスのカントリー調の庭園における真正性とは違うのだ。

侵入者・泥棒・ばい菌：汚れの地理学

放浪者は「ホーム」という決められた境界を侵犯する際、同時に清潔さの向こうに広がる領域をも明確に指し示す。

(Stallybrass and White, 1986: 129)

旅行者たちは田園地方のユートピア的なものを発達させたが、それは、神秘、フェスティバル、共有や利用の自由を連想させる真正性に基づいていた。そのため多くの地元住民にとっては、いかなる場所に旅行者たちが存在していても、たいていは騒動や恐怖のタネとなった。たとえ少人数で駐車するだけであろうが。特にフェスティバルを開催するならば。旅行者たちは、地元住民にとっての田舎の真正性の感覚に挑戦するのだ。この恐怖の源泉は、三つの主たる道筋、すなわち不法侵入、犯罪、そして汚れに関することを通じて表現される。

心配のタネと地元住民の(敵対的な)反応の強さは、いかなる物理的危険にも起因していない。たとえ、旅行者たちがそういうものとして表現されていても。そうではなくてそれは、目に見える他所者の外的人格をとりまく不安に関係している。この不安は、彼/彼女の怠慢によって、田舎の平和や静寂といった地元住民になじみ深いユートピア的なものを粉砕してしまう他所者の能力の源となっているのだ。これらの心配は、汚れ、病気、麻薬飲用による汚染の恐怖として表現される。旅行者たちの異質なライフスタイルが恐れと汚染の源泉として定義されることで、目に見える未知の心配を生み出す未遂行為が創出されるのだ(Young が 1990 年にした Greenham Common の女性に対する反応についての類似した研究を参照)。ダグラス(Douglas, 1984)が言うには、田舎のホームや村の真正な空間は、旅行者たちの放浪生活によって汚染される。彼/彼女の他性が、身近な境界を侵犯するのだ。しばしば旅行者たちのスタイルの一部となっている汚い身なりが、取りざたされ、そして道徳的秩序なき状況として考えられたのは注目値する。他所者の境遇が、汚れを持ち込むものだとたいてい思われていたのだ。旅行者たちが居座る空間は、汚染され、不潔で、卑猥で感染していると見なされている。このことは、地元ソールズベリー新聞における、旅行者たちがその地域を訪れた折々の記事からの、以下の一連の引用に明らかである。

汚くてむさくるしい玄関の外に座っている奴ら。そいつらをまたぐのが嫌いなお客さんたちを失ってしまった。...やりたい放題やるから、奴らとその場所に残したありさまはひどいもんだ。そして、そこで私が見た奴らの衛生状態といたら。とても人間とは思えない。

(Salisbury Journal, 10 June 1976)

アムスベリー(Amesbury)西部で生活するわれわれは、私有財産の侵害に耐えなければならなかったんだ。先週、奴ら下層民が、ウッドフォード(Woodford)からカウンテス・ロード(Countess Road)までのエイボン川を占拠しやがった。奴ら、好き放題に振る舞い、田園地方を破壊して、薪のために木を切り倒しやがったんだ。

(Salisbury Journal, 1 July 1976)

ストーンヘンジで開催されるフェスティバルのコメントとして、

私はストーンヘンジに格別の思い入れがある。そこで、国家や国の記念碑に対するそういう無礼が腹立たしいんだ。奴らの異質なライフスタイルには、泥沼や荒地とかの無用な場所がお似合いなんだ。納税者や地方税納付者が目もくれないようなさ。

(Salisbury Journal, 1 July 1976)

なんでうちらが毎年くずどもにやられなきやいけないんだ。そいつら、店に入っては新鮮な果物や野菜、そして他の包装してない商品をいちゃくまわすんだ。常連客はもう見向きもしなくなる。

(Salisbury Journal, 23 June 1983)

同じように

農地に不法キャンプする 30,000 人の侵入者について読んだら、想像できるだろ。奴らが残していった、排泄物、汚れ、プラスチックのゴミ、壊れた車両を。

(Salisbury Journal, 12 June 1986)

他の記事は、旅行者たちの存在が、いかに地元を汚したのかについてコメントしている。

いかなる集会も許されない、というヒッピーたちへの全国的な警告にもかかわらずなされた、このつかの間の活発なイベント。何千人もの人たちによる全地域の二週間わたるレイブ、としてのみ描かれうる過去の出来事と、匹敵するに違いない。

(Salisbury Journal, 29 June 1989)

地元の憲兵であるロバート・キー (Robert Key) は、旅行者たちが肝炎と HIV の温床足りうるかどうかという調査を地元の新聞で報告した (Salisbury Journal, 22 May 1986)。

全体的に、これらの反応は旅行者たちを他者と認識している。この「他者」は、侵入し、汚染する他所者である。ジンメル (Simmel) の用語でいう、「今日やってきて明日は居着く」 (1971: 143) 者だ。新世代の旅行者たちが嫌われるのは、いつも動いているからではない。彼/女らは滞在するかもしれず、近隣の親密さをぶち壊して地元を汚染し、地元住民にあらゆる種類の恐怖をもたらすからである (Bauman, 1990; Shields, 1992b を参照)。ちょうど、数世紀さかのぼったユダヤ人、ジプシー、放浪者の場合のように (Biere, 1985; Mayall, 1988 を参照)。旅行者たちは、どこか他に属しているからでなく、どこにも属してないから邪魔者なのだ。旅行者たちは、単に時空間の外にいて、場所に定位できないのではない。場所の経験と、「汚く」て「けがらわしい」 (Douglas, 1984) と表象する道徳的秩序の間の歪みにいるのだ。旅行者たちは、彼/女らの出自と同じくらい胡散臭い身分なのである。この若者文化は、敵対する田園地方のユートピア的なものに直接襲いかかるのだ。どこか絵のように美しく牧歌的なものとしての田園地方のユートピア的なものに (Halfacree, 1996 を参照)。

まとめ

本章では、新世代の旅行者をマランのいう中性の領域に位置づけることを試み、中性を田園地方と関連づけた。これは、政治的な意味においては決して中性ではなかった空間である。旅行者たちが持ち込む心配と、近年彼/女らに押しつけられた法律は、みな争われた空間性に基づいている。この空間性は、自然や田園地方に対するわれわれの理解を教えてくれる。新世代の旅行者たちと田園地方に住む人々は、ロマンティックなまなざしとしてアーリ (Urry, 1995) が描き出したものを共有するかもしれない。ロマンティックなまなざしは、道徳的秩序の源泉としての真正さを強調し、ホームの思想の基礎をなしている。しかし、真正性を構成する各々の感覚は多様多様である。旅行者たちにとっての田舎の真正性は、絵のように美しく牧歌的な

ものにはない。大部分の英国国民にとってためになるそれには。そうではなくて、神秘的で霊的な何かとしての自然の真正性にあるのだ。さらには、そのような自然の見方との調和の中にある、表情豊かでコミュニタリアンな何かとしての社会の真正性にあるのだ。旅行者たちが参画している文化ポリティクスは、はっきりとした空間的ポリティクスである。自由、放浪生活、部族意識、自然との調和、といった思想が表現されるのはそこでだ。この表現は、社会に対する見方が空間的实践へ翻訳される、ユートピア的なものを通じてなされている。旅行者たちの空間的实践は、地元住民、農夫、土地所有者、地元当局、警察、ナショナルトラストやイングリッシュ・ヘリテージのような田園地方の保護団体、といった他の人々の空間的实践と衝突するようになる。彼/女らのユートピア的なものは、旅行者たちのユートピア的なものによって脅かされる。そしてこの対立がせめぎ合いの空間としての田園地方を生産するのだ。このせめぎ合いは、不法侵入の問題、(土地)利用の権利、集合の権利、所有権の尊重などで表出するかもしれない。けれどもそれは、もっぱら表象のせめぎ合いなのである。旅行者たちが敵対者と共に参画するポリティクスは、表象のポリティクスである。そこでは、あるユートピア的なものが他のユートピア的なものに直面するのだ。旅行者たちは、この表象のポリティクスによって構成された空間に存在し、かつそこで発展した。つまり旅行者たちは、どこにもない場所 (no-place) と良い場所 (good-place) のあわいの裂け目、言い換えればアンビバレントなユートピア的 (ou/eu-topic) 空間に存在しているのだ。田舎の真正性についての表象のせめぎ合いが存在するそこに。新世代の旅行者たちのような若者文化の空間は、差異と同様に差延の空間なのである。

注

1. シールズ (Shields, 1991) は、「社会的空間化」という用語を、空間的实践を通じた空間の表象の社会的構築を説明するために用いている。これは、実践を通して空間がいかに構成されるのか、についてのわれわれの包括的理解に役立つものである。けれどもその用語は、空間の社会的構築を一般化し、そこに含まれる様々な実践のいくつかを見失わせる傾向がある。ユートピア的なものは、社会的空間化の一形式である。けれども、特に価値の間

- 題に関係しており、良いことや秩序についての思想を空間に転化する。ここでは、この特性が私に関係している。
2. このような懐古趣味は、若者文化研究の当然の帰結の一つである。なぜなら、調査者が異なった社会的時間をもってそのグループへ働きかけ、調査を実行するからである。私の調査は主として、重要な情報提供者へのある程度組み立てられたインタビューと、フリー・フェスティバルでのちょっとした記録映像、そしてそこでのわずかな参与観察を通じて実施された。それは、1990年4月から1992年9月まで、私の博士論文のためになされたものである（Hetherington, 1993を参照）。
 3. 「カウンターカルチャー」と「サブカルチャー」の両方とも、問題含みの用語である。そこで私は概して使うのを好まない。何に対してカウンターで何に対してサブなのか？どちらの場合にも、単一でヘゲモニックなメインストリームの文化を暗に前提にしている。若者文化の研究（Thornton, 1995）でも、より一般的なポストモダニズムの議論でも、最近の議論は、いわゆる単一のものとしてのメインストリームは存在せず、消費や商業化の文化とそれにいつも反対するものの相互共生関係があるとするだろう（Martin, 1981を参照）。サブカルチャーは、メインストリームを構築する。ちょうどそれがメインストリームに関連して構築されたように。
 4. いわゆる新部族の情緒的コミュニティにしばしば関係する社会化の型を特徴づけるために、私はブント（*Bund*）というドイツの概念を使うことを好んできた（Hetherington, 1992, 1994）。私にとってこの用語は、概念的に明瞭であり、「新部族」より範囲が制限されている。それは、他者の出現と共にある強い同一化と連帯を有した、選択的で情緒的なグループ分けの型に焦点をあてるのである。新部族意識は、アイデンティティと戯れ、互いに同一化する選り抜きの数少ないグループの人々を基礎として一般化する方法としても、西洋社会全体の状況を定義づけるにしても、大ざっぱすぎるのだ。
 5. ディガーズ（*Diggers*）は、平等主義者の集団である。彼/女らは、ウィリアム・エベラード（William Everard）とゲラード・ウィンスタンリー（Gerrard Winstanley）によって導かれ、ヨーロッパの再洗礼派の運動に影響されていた。ピューリタン革命の間のディガーズは、すべての財産は共有の状態に保たれねばならないという見方を促進させた。1649年、ディガーズは、テムズ川のウォールトンに近いセント・ジョージの丘にキャンプを張った。彼/女らはそこが自分たちの土地でないにもかかわらず、まるで共有地かのように耕作をはじめたのだ。

文献

- Bauman, Z. (1990) 'Effacing the face: on the social management of moral proximity' *Theory, Culture and Society* 7, 1: 5-38.
- Bauman, Z. (1992) *Intimations of Postmodernity*, London: Routledge.
- Becker, H. (1946) *German Youth: Bond or Free?* London: Keegan, Paul, Trench, Trubner.
- Biere, A. (1985) *Masterless Men: the Vagrancy Problem in England 1560-1640*, London: Methuen. A・L・パイアー著、佐藤清隆訳（1997）『浮浪者たちの世界：シェイクスピア時代の貧民問題』同文館出版。
- Chippindale, C. (1983) 'What future for stonehenge?', *Antiquity* 57: 172-80.
- Clark, M. (1982) *The Politics of Pop Festivals*, London: Junction Books.
- Cohen, E. (1973) 'Nomads from affluence: notes on the phenomenon of drifter tourism', *International Journal of Comparative Sociology* 14, 1-2: 89-103.
- Cohen, E. (1979) 'A phenomenology of tourist experiences', *Sociology* 13, 2: 179-201.
- Derrida, J. (1976) *Of Grammatology*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Devereaux, P. (1990) 'Stonehenge as an earth mystery', in C. Chippindale, P. Devereux, R. Jones and T. Sebastian (eds), *Who Owns Stonehenge? London*. Batsford, pp. 35-61.
- Douglas, M. (1984) *Purity and Danger: An Analysis of the Origins of Pollution and Taboo*, London: Ark/Routledge. マアリ・ダグラス著、塚本利明訳（1972）『汚穢と禁忌』思潮社。（初版は1966年にLondon: Routledge & Kegan Paulから出版。文献の *the Origins* は *Concepts* の間違いと思われる。）
- Earle, F., Dearling, A., Whittle, H., Glasse, R. and Gubby (1994) *A Time to Travel? An Introduction to Britain's Newer Travellers*, Lyme Regis: Enabler Publication.
- Eliade, M. (1969) *The Quest: History and Meaning in Religion*, Chicago: University of Chicago Press. ミルチャ・エリアーデ著、前田耕作訳（1973）『宗教の歴史と意味』せりか書房。
- Foucault, M. (1986) 'Of other spaces', *Diacritics* 16, 1: 22-7.
- Garrard, B. (1986a) *The Last Night of Rainbow Fields Village at Molesworth*, rev. edn, Glastonbury: Unique Publications.
- Garrard, B. (ed.) (1986b) *Greenlands Farm*, Glastonbury: Unique Publications.
- Garrard, B. Rainbow, Jo and McKay, A. (eds) (1986) *Rainbow Village On the Road*, Glastonbury: Unique Publications.
- Genocchio, B. (1995) 'Discourse, discontinuity, difference: the question of "other" spaces', in S. Watson and K. Gibson (eds), *Postmodern Cities and Spaces*, Oxford: Basil Blackwell, pp. 35-46.

Bauman, Z. (1990) 'Effacing the face: on the social management of moral proximity' *Theory, Culture and*

- Halfacree, K. (1996) 'Out of place in the country: Travellers and the "rural idyll"', *Antipode* 28, 1: 42-72.
- Hetherington, K. (1991) 'The geography of the Other: Stonehenge, Greenham and the politics of trust', *Lancaster Regionalism Group Working Paper* No. 41, Lancaster: Department of Sociology.
- Hetherington, K. (1992) 'Stonehenge and its festival: spaces of consumption', in R. Shields (ed.) *Lifestyle Shopping: The Subject of Consumption*, London: Routledge, pp. 83-98.
- Hetherington, K. (1993) 'The geography of the Other: lifestyle, performance and identity', unpublished Ph.D. thesis, Department of Sociology, Lancaster University.
- Hetherington, K. (1994) 'The contemporary significance of Schmalenbach's concept of the Bund', *Sociological Review* 42, 1: 1-25.
- Hetherington, K. (1996a) 'The utopics of Social Ordering: Stonehenge as a museum without walls', in S. Macdonald and G. Fyfe (eds) *Theorising Museums*, Oxford: Basil Blackwell, pp. 153-76.
- Hetherington, K. (1996b) 'Identity formation, space and social centrality', *Theory, Culture and Society* 13, 4: 33-51.
- Hetherington, K. (1997) *The Badlands of Modernity: Heterotopia and Social Ordering*, London: Routledge.
- Lowe, R. and Shaw, W. (1993) *Travellers: Voices of the New Age Nomads*, London: Fourth Estate.
- McKay, G. (1996) *Senseless Acts of Beauty*, London: Verso.
- Maffesoli, M. (1988) 'Jeu de masques: postmodern tribalism', *Design Issues* 4, 1-2: 141-51.
- Maffesoli, M. (1996) *The Time of the Tribes*, London: Sage.
- Marcus, J. (1988) 'The journey out to the centre: the cultural appropriation of Ayers Rock', in A. Rutherford (ed.), *Aboriginal Culture Today*, Kunapipi: Dangeroo Press.
- Marin, L. (1984) *Utopics: Spatial Play*, London: Macmillan. ルイ・マラン著, 梶野吉郎訳 (1995) 『ユートピア的なもの: 空間の遊戯』法政大学出版局。(原著は1973年に Paris: Editions de Minuit から出版された *Utopiques: jeux d'espaces*.)
- Marin, L. (1992) 'Frontiers of Utopia: past and present', *Critical Inquiry* 19, 3: 397-420.
- Martin, B. (1981) *Sociology of Contemporary Cultural Change*, Oxford: Basil Blackwell.
- Mayall, D. (1988) *Gypsy-Travellers in Nineteenth Century Society*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Melucci, A. (1989) *Nomads of the Present*, London: Radius/Hutchinson. アルベルト・メルツ著, 山之内靖, 貴堂嘉之, 宮崎かすみ訳 (1997) 『現在に生きる遊牧民 (ノマド): 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店。(原文はイタリア語。)
- Michell, J. (1982) *Megalithomania: Artists, Antiquarians and Archaeologists at the Old Stone Monuments*, London: Thames and Hudson.
- Michell, J. (1986) *Stonehenge: Its History, Meaning, Festival, Unlawful Management, Police Riot '85 and Future Prospects*, London: Radical Traditionalist Papers.
- Mills, R. (1973) *Young Outsiders*, London: Routledge and Kegan Paul.
- More, T. (1985) *Utopia*, London: J.M. Dent [Everyman edn, 1910]. トマス・モア著, 本多顯彰訳 (1934) 『ユートピア: 理想郷』岩波書店。
- Rojek, C. (1988) 'The convoy of pollution', *Leisure Studies* 7: 21-31.
- Rojek, C. (1989) *Leisure for Leisure: Critical Essays*, Basingstoke: Macmillan.
- Shields, R. (1991) *Places on the Margin: Alternative Geographies of Modernity*, London: Routledge.
- Shields, R. (1992a) 'Individuals, consumption cultures and the fate of community', in R. Shields (ed.), *Lifestyle Shopping: The Subject of Consumption*, London: Routledge, pp. 99-113.
- Shields, R. (1992b) 'A truant proximity: presence and absence in the space of modernity', *Environment and Planning D: Society and Space* 10, 2: 181-98.
- Simmel, G. (1971) 'The stranger', in D. Levine (ed.), *On Individuality and Social Forms*, Chicago: University of Chicago Press, pp. 143-9.
- Soia, E. (1995) 'Heterotopologies: a remembrance of other spaces in the Citadel-LA', in S. Watson and K. Gibson (eds) *Postmodern Cities and Spaces*, Oxford: Blackwell, pp. 13-34.
- Stallybrass, P. and White, A. (1986) *The Politics and Poetics of Transgression*, London: Methuen. ピーター・ストリブラス, アロン・ホワイト著, 本橋哲也訳 (1995) 『境界侵犯: その詩学と政治学』ありな書房。
- Thornton, S. (1995) *Club Cultures*, Cambridge: Polity Press.
- Thrasher, F. (1927) *The Gang*, Chicago: University of Chicago Press.
- Turner, V. (1973) 'The center out there: pilgrim's goal', *History of Religions* 12, 3: 191-230.
- Urry, J. (1995) *Consuming Places*, London: Routledge.
- Williams, R. (1985) *The Country and the City*, London: Hogarth Press. レイモンド・ウィリアムズ著, 山本和平ほか訳 (1985) 『田舎と都会』晶文社。
- Young, A. (1990) *Femininity in Dissent*, London: Routledge.